

## 懐妊祝い

西河真功

鏡が何を映すか誰にわかるだろうか。覗いた顔が私の顔で、それに間違いはないが、しかしこれが私のあなたとしての顔かどうか、誰がわかるのか。私は私のそのあなたとしての顔を見たい、どうしても見たい、そう思って、鏡の前に立つ。しかしいつもその試みは挫折する。私は私の顔の方向を知らない。透明な銀の向こうの世界に私はその顔を探す。探しても探しても見つからない顔を探す。一体その顔はどこにあるのか。どうすればその顔を見ることができるとか。

鏡の底で泥鰯が跳ねた。ぬめりのある黒い尾の軌跡を泥が追いかけて水を濁した。濁水の中に顔が溶けて腐った藻になった。

知子が未だ生まれぬ我が子を殺そうと思いついたのは身ごもって四ヶ月の頃だった。

—— 名前、考えなきやね

新しい命を授かった新婚の夫婦には当たり前の、夫のこの何気ない一言が、知子に、我が子を育てる意志のないことを気づかせた。夫の発言に、そうだね、と同意しながら、心の中では瞬時に、殺されるために産み落とされる子供に名前など必要ない、と自分でも驚くほどはつきりとした思いが湧き立つのを感じた。子供を殺すなど今の今まで思いもなかった知子は、動揺して、二人掛けのソファに座ったまま、両手を前に差し出して、周囲の障害物を確かめる盲人のように、空中をまさぐった。

夫は知子の身振りに意味を結ぶことができず、隣に座ったまま、しばらく珍妙なダンスを眺めていたが、この弱々しい手踊りが日常生活を破壊するための儀式なのだとは知ってか知らずか、空気の歪みに深く落ち窪んで世界から弾き出されるような感覚に捕われた。だからその感覚を払いのけるように声を出した。

—— ダしたの！

自らの存在を世界に投げ出すために口を突いて出た言葉は、どうしたの、のつもりであった。

—— 何を

夫の問いに応えると同時に、知子は日常生活を営むための体を取り戻した。平然と問い返した知子に見つめられた夫は、過去の数秒間、確かに何かが崩れはじめていた、と漠然と感じながらも、その感じの残像を掴み損ねた。というのも、知子の眼がどこにでもいる普通の人間の眼だったから、イヤ別に、何でもないよ、と一言二言で容易に片づけることができた。そうして、夫がテレビのリモコンを探そうと、知子が洗い物をしに台所へ行こうと、二人一緒に立ち上がったときには、日常生活のための蛍光灯が二人を白々と冷たく照らしていた。

知子の住むアパートのある住宅街には有名な婆さんがいる。この婆さんが実際に住んでいるのはこの住宅街から北へ一キロほど離れた川辺の安アパートだが、平日の日中に必ずやって来て、野良猫に餌をやる。知子のアパートの近くでは決まって三カ所にそれぞれ立ち止まって、ライトブルーのプラスチックの皿に残飯の雑炊のようなものを盛ると猫たちに食べさせる。一つの場所に二匹か三匹の猫が、婆さんが来るなりどこからか現れて、物欲しそうに食事の準備が終わるのを待っている。皿が差し出されると、競うように食事をはじめめる。食事の間、婆さんは、ポケットから煙草を一本こなれた手つきで取り出して一服しながら、時折、さっさとお食べ、と猫に叱責している。

知子が気になっていたのは、この、さっさとお食べ、という婆さんの口調であった。平日は毎日のように来るのだから、さして忙しいわけはなく、猫の餌をわざわざつくる手間を考え合わせると、一日のほとんどを猫に費やしているほどなのであって、よほど猫に愛情をもっているだろうに、どうにもこの、さっさとお食べ、が鋭く窮屈な声で発せられるのだ。鴉が箒で叩かれたらこんな声を出すのではないかと思われるような、細い喉を割るような声の出し方だった。

知子に御近所付き合いはほぼなかつたが、それでも井戸端ならぬ道端で立ち話をしている老人や主婦の声を耳にすることはあつたから、この婆さんがあまり良く思われていないことは知っていた。もっぱら議論的になるのは、野良猫が増えることによる被害ではなく、この婆さんがわざわざここに来て猫に餌をやるということであつた。その点については知子も同感で、なぜわざわざここまで、来なくてはならないのか、常々疑問に思っていた。

昨夜の子殺しの想念を頭の中で転がしながら、家事と昼食の一段落した午後二時のワイドショーウ——このテレビ番組を見るのは日課になっていた——を虚ろな心持ちで見るともなく見ていた。チベットの僧侶たちの抗議デモの映像を曖昧に把握しながら、なぜ私は子供を殺すのか、と自問した。

特別な理由がないのは明らかだった。それなのにもうすでに殺そうという意志をもつ自分がいることに、知子は少し笑った。

知子は自分のことを内省的な人間だと思っていた。行為までに十も二十も頭の中の手続きを踏む類いの慎重さをもった人間だと思っていた。多くの場合、反省的な過程に力を費やすあまり、行為にまで至らなかつた。そのような人間が、人を殺す、しかも我が子を殺そうと決めるときに、気づいたらそうなっていたという無責任な態度で、決められることがあるだろうか。知子は、自分の内にある隙間風のような決意がどこからやって来たのか、皆目わからなかつた。とはいえ、子供が生まれるまで五ヶ月はあるのだから、このように考えてみることもいつもの癖の一環なのかもしれない、と半ば誤魔化すように思った。

気分を変えようとテレビのチャンネルを切り換えた。別のワイドショウだったが、またチベットの僧侶たちの抗議デモだった。黄土色の袈裟をまとった僧侶たちが群れをなして街道に大きな流れをつくっていた。中国政府の弾圧に耐え、抗って、自らの信念を提示しようとする者たちの意志は群れをなす一人一人の僧侶の底で、揺るぎなく存在していた。知子はその意志の所在を、自らに照射させて、確認しようとした。確信をもってその所在を確かめることはできなかつたが、一つのイメージが知子を捕えた。それはまっすぐに延びた大幅の舗装された道路だった。埋め立てのアスファルトがきつちりと道に敷かれて、蒸気機関車が発車を報せるように、放たれた蒸気にはじまりの高揚が漂っていた。道の両側には熱の感じない明るい青や赤のネオンに飾られたビルが繁華街らしく無数に建っていたが、道路には車一台、人一人いなかつた。無数のビルの窓という窓には窓ガラスの光沢を一身にまとった死人が覗いていた。なだらかな斜面を上って向こうへ抜けるまで一筋に延びた道路は、その頂点で快晴の空へ開かれていた。雑居ビルとそこにひしめく死人の混沌を貫く

滑走路のようにも見えた。壮観だった。

夫が帰宅するのは午後七時頃と決まっていたが、その日は四時にアパートに戻った。ガス会社に勤める彼は、ガス器具の点検のために個別に住宅を訪問するのだが、時間が空いたので一度家に戻ったという。帰るなり愛用のリュックサックを肩から滑らせて玄関脇に置き、その足で浴室へ消えると五分もしない内にシャワーを浴びて出て来て、冷蔵庫からウーロン茶を取り出して一杯ぐいと飲み干すなり洗面所で身支度を整えて再び家を出た。

彼の一連の行動には無駄が全くなく、マニュアルをきちんとこなす新人アルバイトのように淡い緊張感があつて、気持ちのいい仕事ぶりにさえ感じられたが、最近同じように早く帰ってはそそくさとして行くことが何度かあつたので、それが何を意味するのか気づかない方が難しかった。しかしなぜわざわざ家へ戻つてシャワーを浴びねばならないのか。そこから想像しうる情景を思い描いた末に、それが知子への告白になるという危険に思い至らないほど我が夫はオツムが弱いのか、そう思い至つて、それは違ふと思ひ直した。夫は律義な人間で妻に隠し事ができないのだ、そのように思う方が知子には少なからぬ現実味があつた。律儀だからとてさすがに直接妻に自らの過ちを伝えはしないだろうが、一方で、その過ちを余生大事に秘め隠すことなど、まずもつてあの種の律義な男には無理だ、そのような不誠実に耐え忍ぶことはできない、だから彼は、彼の律儀という流儀に従つて、妻の前で見事に整理された不自然なほど自然な一連の行動をとつて見せたのではないか。知子は、夫の行動を分析しながら、ある感情が、自らの内から、ふつふつと湧き上がるのを感じた。それは夫への愛情とも憎悪とも違ふものであつて、ただポジティブな力をもつた何かであることだけが知子にもわかつた。律儀のパフォーマンスを披露した夫を憎む気持ちなどさらさらなかつた。むしろ愛しさを増上させてもよいほどに、知子の愛した彼らしさが十全に発揮されていた。し

かし実際は、愛情のふくらみとは別の何かを知子の中で動き出したのだった。その感情は、木立の間を吹き抜ける風のように、清々しいものだった。

緑の葉をびっしりとつけた枝々は、風に揺られて、互いにこすれ合い、ひとまとまりに掴むことのできない音の群生を響かせた。交響する葉と枝のざわめきは、宙を満たして知子の頭上から手足にまで達し、そこで小さな痙攣を繰り返した。その身震いは羊水にわずかな振動を与えた。そのとき、胎内の変化に刺激を受けて、新しい生命が、踊るように、その体を捻らせた。その動きに、知子は、飛翔する龍の尾のうねりを連想し、立ち上がると、水中を掻きわけて歩くように手足をゆつくりと四方八方に進ませながら、踊った。

下校途中の小学生が婆さんと猫の周りに集まっていた。婆さんは小柄で、頬骨や腕の骨を浮き彫りにその上を皮膚がちぢれて覆っていて、腰は少し曲がっていたから弱々しい姿ではあつたけれど、眼が鋭く、口がへの字に歪んでいたこともあつて、小学生には恐い存在でもあつた。だから婆さんが猫に餌をやるのを遠目に見ることはあつても、餌を食べる猫を間近で観察したり、婆さんと話したりすることはまずなかつた。それなのに、その日、婆さんと猫を小学生が囲んだのは、いつもの猫の中に、子猫が一匹紛れ込んでいたからであつた。

子猫は全身灰色の柔らかい毛で覆われていた。やがてビロードのような艶のある黒猫に成長することは、婆さんの長年の経験からすぐにわかつた。子猫は大人の猫に混じって真似るように餌を食べた。

—— 食事の邪魔をしちゃいけないよ

と、煙草をくゆらせながら、いつもより明るい声音で、騒ぎ立ててはしゃぐ子供たちに、婆さんは言った。

焦げ茶や深緑のランドセルに安全用の黄色いビニールカバーをつけた小学生は、子猫が物珍しいという当初の興奮から離れて、その余波の喧騒にじゃれ合っていた。そうした子供染みた興奮が、陽光に支えられて、空气中に微細な塵のように散って婆さんの呼吸をわずかながら乱した。

—— 最近のランドセルは…… 立派だね……

誰に言うともなく、ただ言葉を発することで、胸の内にくすぶる高揚の前兆を抑制しようとした。しかし、そうしてみた次の瞬間には、顔面の裏から笑みの原型が透明な光のように射してくるのだった。その原型は歪んで硬直した婆さんの顔面を、熱い湯で溶かすように、蒸気を立てて、支配しようとした。

そのとき、買い物を終えた一人の主婦が、アニメのキャラクターがプリントされたエコバックから長ネギや大根をのぞかせて、婆さんと猫と小学生の側を通った。それに気づいた婆さんは、気管を昇る透明な虎を組敷くようにぐつと腹を据えて、

—— さっさとお食べ

と、叱咤したのだった。

笑みの原型は婆さんの顔面から消え、そこには長い年月を経て蓄積した馴染みの軋んだ表情が、べったりと張りついていていた。子供たちはなお騒ぎながらも、自ずと帰宅の路についた。

子猫の登場によって活気づいた餌場のためにいつもより遅く普段の餌やりの行程を終えた婆さんは、帰路、先の小学生の一群にいた一人の女の子が道端に立ちすくんでいるのを見つけた。いつもなら気に留めるだけだったろうが、その女の子を見つけると、子猫が広げた感興の欠片が揺れ動いて、他者との交流を促すようだったから、どうしたの、と声を掛けた。女の子は何も言わずに、道端の生垣の向こうをじっと見たまま立っており、右手でスカートの端をぎゅつと握って、少し怯え

ているようにも微笑しているようにも見えた。生垣の奥はアパートの一室で、覗くのを躊躇ったが、女の子が反応しないので、その視線の先に何があるのか、婆さんは確かめた。

立派に茂った椿の生垣には萎れかけの赤茶けた花がいくつもついていて視界を遮っていた。それに加え婆さんの眼球は調子が狂っているから、その向こうの光景が像を結ぶまでに時間がかかった。花と枝葉の隙間から、はじめは何かが動いていることだけが見えて何であるのかわからなかったが、それが妊婦であることは、女の子が不思議そうに、おなか、と呟いたことから理解された。

耳の下から頬を紅潮させた妊婦が、手足を宙にゆっくりと絡ませながら、脈絡のない出鱈目な動きで、恍惚と踊っていた。後ろで結わえている髪が乱れていなくなったから激しく踊っていたとは思えず、ただ四肢の関節の機能を確かめるように縦横無尽にくねらせていて、動きの速度が遅く安定しているのが、優雅にさえ見え、品があった。汗が流れているのかどうかまでは婆さんには見えなかったが、ピンクに染まった頬が体全体から熱を発していることを示していた。

女の踊りには時間の吹きだまりをつくる力があつた。空気を掻きわけると同時に時間も掻き混ぜて、通常の流れを乱し、そこに吸収しながら圧縮するような力があつた。手のひらを外側へ向けて右手を右へ水平に掻く、あるいは左足を少し浮かせて膝の関節を軸に時計と反対周りに足で円を描く、といった動きのそれぞれが、時間を、こちらへあちらへとたぐり寄せ、従来の流れとは違う新しい仕方であらわえていった。身振りの軌跡がその都度生まれる時間の糸をひいていた。それは優美だったが、一方で蜘蛛の巣にかかった獲物のようにもがき苦しんでいるようでもあつた。あるいはまた、水中でもう生きることを止めた人間が最期の力で舞うように……

婆さんの内部で、子猫が呼び覚ました感興に似たものが、再びくすぶりはじめた。鼓動が速まるのを感じた。萎びた体のいたるところで、細かく震える筋肉が、習慣の蓄積がつくったか細い骨と



乾いた皮膚を、新しい生命へ導こうとした。歪んで凝固した婆さんの顔面の裏から、また笑みの原型が押し寄せていた。干上がった顔の皮膚の皺の間に水路がひかれようとしていた。

しかしそのとき、部屋の内部分から見返す視線に気づいたのだった。軽く息を荒げた妊婦が、窓の向こうに突っ立って、こちらを見ていた。婆さんは我に返り、馴染みの体を取り戻すと、傍らの女の子を気にも留めずに、帰路を急いだ。

アパートの自室のドアの前で、餌皿や餌を詰める容器の入った布製の手さげ袋から、鍵を出そうとして、はじめて、左手の握り締めた椿の花に気づいた。手のひらの上で、萎れかけた花は、握力でさらに形を崩していたが、花弁のつけねに鮮やかな紅色を残していて、そこから美しい形が新たに生み出されるように思われた。

知子の胎内で生命が動くのははじめてではなかったが、昨日ほどその存在を実感したことはなかった。いよいよ腹の中の我が子が生きているのだと思われて、この子をどう処理するのか、もっと誠実に考えるべきだと思うようになった。

—— 三人目はどうしたもんかね

—— どうって何が

—— あんたは暢気なもんやな、考えてみい、このくそ忙しい刈り入れ時に、嫁が働けんにや、困ったもんやわ

墮胎禁止令が出されたのは二ヶ月ほど前のことだった。新しい藩主の意向で、身ごもった子をおろすの類いは子殺し同然の非人のすることとされ処罰が決まった。それとともに懐妊届と出産届の提出が義務づけられた。これには証人、組頭、庄屋の同意が必要とされ、出産届にいたっては村の

隣家や組合の者が出産に立ち会って確認することが求められた。

—— 食うもんやっっていくらもあるわけやなし

—— そう言うたつて母さん、侍さんがうるさく言うて来るわ

姑の入り知恵で墮胎術に長けた医者を出向の街から呼ぶことにした。この医者の評判は前々から聞いていた。なんでも按摩のように妊婦の腹を揉むだけで流産が期待できるということだった。流産であれば村人の立ち会いでも申し訳が立つし、役人に咎められることもない。咎められたところでこれが墮胎術の故かどうかなどと詮議をしてもわかることではない。

小さい村のことだから医者がやって来たことは隣家に筒抜けだった。

医者が帰って二日後、田んぼの畦道を不格好に走ってくる隣家の婆さんが、嫁が産気づいた、と息を切らしながら言ったのを聞いたとき、姑は仕事の手を休めて一瞬体の力が抜けるのを感じると、ありがとうさんでした、と心の中で仏様に拜んでぐっと再び力を入れ、そりゃ大変やわ、と婆さんに続いて家へ急いだ。

知子は中世農村の出産事情をいつか何かの本で読んだと思いを巡らせていた。その中に産気づいた妊婦が誤って、厠に子供を産み落としたという事故の記憶があった。知子の中でこの記憶が奇妙な想念を形成しようとしていた。厠にしゃがんでいる女が赤子を産む、この暗い想像が赤子と汚物を重ねて想像させた。その混乱した想像が、赤子の命に対する責任の在処、その既存の認識に揺さぶりをかけていた。自律して生きることのできない子供の命はその子供のものだろうか、と知子は考えた。それぞれの人間にそれぞれの命が平等に分け与えられている、と自明のこととしてそう思っていた。しかしどうか。汚物と赤子を重ね合わせる想像力はこの当然の前提を破壊する力をもつ

ではないか。貧困に苦しむ生活で、無責任にも子種の侵入を許した母胎は、あるいは強姦の類いで身ごもって、産んでも育てられないと悟り、いそいそと便器を跨いだその姿は、毎日垂れ流す汚物のためのそれとどこか違っていただろうか。苦しみ抜いた決断だったにせよ、子の命を支配するのは親であつたのではないか。それはつまり子の命は親にあつたということではないか。産まれたばかりで右も左もわからないような生き物には、たといそれが人の形をしていたとしても、自らの命を案配する権利などというものはなかつたということか。